

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 26 日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520913

研究課題名(和文) 古代地中海世界における西方ギリシア人のダイナミズムー現地社会からの視座ー

研究課題名(英文) the dynamism of the relations between the Western Greeks and the Locals in the Ancient Mediterranean

研究代表者

長谷川 岳男 (HASEGAWA, TAKEO)

鎌倉女子大学・教育学部・教授

研究者番号：20308331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：西地中海域に移住したギリシア人の実態を考察した結果、当初の状況は母市が組織的・計画的に植民を実施したのではなく、暗黒時代末期以降に三々五々、移住した人々が時間の経過とともにネットワークを構築して一定規模のコミュニティに成長しており、それは純粋なギリシア人だけのコミュニティではなく、現地の人々も受入れたり混交したりし、自らのアイデンティティをギリシア人とする場合もあった状況が明らかになった。このような認識をするためには、考古学や理論的アプローチも適用してギリシア人、現地人それぞれの変化、そして両者の関係の変化のダイナミズムを通時的に考慮する必要も示した。

研究成果の概要(英文)：The followings are the results of this research. The recent archaeological results have made clear that the Greek poleis in the Western Mediterranean were not systematically planted by the mother poleis at the beginning. The Greeks had immigrated into these regions spontaneously since the end of the Dark Age and had gradually constructed their own networks, and finally formed poleis. These poleis were not made of Greeks only. It was the case that some female locals joined in through marriages with male Greeks or some male locals voluntarily became the members and had the identities of Greeks. It should be taken into consideration that these perceptions could be had only by the reconsiderations of the literary texts, the aids of the results of the recent archaeological researches, the application of the theories of the sociology or the anthropology, and observing the transformations of the Greeks, the locals, and the relations between the Greeks and the locals diachronically.

研究分野：古代ギリシア・ローマ史

キーワード：古代ギリシア 西地中海 植民 ポスト=コロニアル 文化接触 アイデンティティ エスニシティ ポリス

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は古代ギリシア世界理解における従来のアテナイ中心主義的な認識の再検討から計画された。古典期までのアテナイを基準に、大部分がギリシア人から成るギリシア本土に視点を据えてギリシア世界を理解する姿勢は、1980年代以降、批判の対象とされており、一方でギリシア人のアイデンティティに関しても、やはり80年代以降、エスニシティは本質的にではなく構築されるものであるというアンダーソンやスミスの研究に触発される形で、ヘレネスやドーリス人などの概念の形成過程がジョナサン・ホールにより検討されて、従来の認識の修正がなされるようになった。そしてギリシア人が自らのアイデンティティを強く意識するのは中心部ではなく、異民族や異文化に接する辺境であるとの指摘もあり、ギリシア人の各地への移住は研究開始当初、研究が著しく進展している分野であった。

(2) 前8世紀以降のギリシア人による地中海全域への移住は一般的に「植民 (colonization)」という用語で表されてきた。しかしこの用語には、近代の欧米の帝国主義による植民地化という歴史的経験が含蓄されるため、当時の現実を誤解させることになるという批判が、ポスト=コロニアリズムの影響を受けて90年代から展開された。当初、母市が計画的かつ組織的に市民を送り出したという認識は現実に当てはまらず、近代以降の経験に影響されたものであるという指摘である。加えて、高度な文明を有するギリシア人が、野蛮な原住民を感化して、彼らを文明化=ギリシア化 (Hellenization) していった構図も、ローマ化 (Romanization) 概念と同じく近代以降の帝国主義的な理解が根底にあると主張されるようになった。

(3) ギリシア人の「植民」に関する上記の欧米の新たな研究動向は本邦ではほとんど紹介されることもなく、これまでの認識が「大植民時代」と呼ばれる(前750年頃~前550年頃)初期の動きのみに限定されていた。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で述べた研究状況を踏まえて、従来のアテナイ中心主義的なギリシア世界像の修正することを目的とした。ただし限られた時間と予算では多岐にわたる考察は不可能であるため、以下の点に焦点を絞ることにした。近年、現地調査などの進展により多くの研究がなされている、本邦では今までギリシア史研究においてほとんど取り上げられることのなかった前8世紀以降、西地中海へ移住したギリシア人の実態を取り上げ、「植民 (colonization)」や「ギリシア化 (Hellenization)」概念の問題性を考慮して、考古学的研究成果や文化人類学などの成果を摂取して、極力、現地人の視点から

ギリシア人との接触を考察し、その結果、移住後にギリシア人がギリシア人として、あるいは所属ポリスの一員としていかなるプロセスでそのアイデンティティを構築し、それがどのように変化していったのかを通時的に分析することにより、従来のギリシア像の修正に寄与することを試みた。

3. 研究の方法

(1) 西地中海域のギリシア人の活動は多様であるため、対象をいくつかのポリスに絞った。選定の理由は近年の活動報告や研究論文の入手しやすさ、現地踏査が可能な場所であること、史料状況が良好であることである。その結果、校務のため現地踏査の時間を取れなかったシチリアのポリス、イベリア半島のポリスを除外し、イタリア南部のタラス、メタポンティオン、シュバリス、カンパニア地方のネアポリス、ポセイドニア、ピテクサイ、そして南仏のマッサリア、ニカイアの状況を以下の方法を用いて調査した。

(2) 従来のイメージが文献史料により構築されていることを考慮し、これらの情報の伝承状況、信憑性、その解釈の系譜など、史料の再検討を行った。これらの史料の多くが後世の叙述に断片で含まれている状況を鑑みて、昨今、改めて再検討の必要が主張される断片の解釈などの史料論の成果を踏まえて、当該ポリスに関する文献史料の読み直しを進めた。

(3) 現地人の視座に立つためには文献史料の解析からは不可能である。そこで、近年の進展が著しい考古学的成果、また社会学、文化人類学的アプローチを摂取することに努めた。

(4) (2)、(3)での成果をもとに、新たな視点、枠組で移住したギリシア人の実態を分析した。その際、碑文史料や建造物の遺跡などを活用して、通時的な考察を試みた。

4. 研究成果

本研究に着手するとまず、従来の認識を修正するためには近年の新たなアプローチ法を摂取する必要性に迫られた。そこで新たな方法論の有効性を説明した後、西方ギリシア人のコミュニティに関するケーススタディを示し、最後に結論として得た本テーマの可能性を提示するという順で研究成果を述べたい。

(1) 有効な方法論

① 史料の再検討

前8世紀から前6世紀にかけて、ギリシア人が地中海の多くの沿岸部に移住した際の状況に関する情報の大半が古典期以降のものであり、現存する縁起話の信憑性への疑義が考古学、文学論などの分野から盛んに提出

された。これまで縁起話について、移住当時の現実を核に後の世代に継承されたと考える歴史学者が多かったが、これらの批判を受けて縁起話やその後の状況に関する伝承は再吟味する必要に迫られている。

さらにこれらの情報は、前4世紀以降の叙述がローマ期の著述家に断片史料として含まれることが多いのであるが、彼らが元の叙述の内容を変えることなく忠実に記録しているのか、またなぜこれらの断片が後代の著述家に採択されたのかが近年盛んに議論されており、これらの研究を考慮するのならば、移住に関する情報には執筆された時代の状況が反映している一方で、断片史料が含まれる叙述を執筆した時代の認識が、これらの情報の選択や構成に深刻な影響を与えていることに注意しなければならない。特に大半の現存史料が執筆されたローマ期のギリシア認識に、移住後の描写は多大な影響を受けている点を考慮すべきである。それゆえ本研究では西方ギリシア人の実態を現存史料が執筆された時代に注目して、現地人との関係の変化やギリシア人たちのアイデンティティの展開など通時的な考察を中心に進め、これらの文献情報を考古学的資料とつぎ合わせて現実の把握を試みた。

② 考古学的資料の活用

ここ20年の考古学の進歩も著しく、古代の西地中海域における様々な人々の活動に関しても文化人類学的なアプローチを導入したり、現地での発掘成果を効果的に利用して盛んな議論が展開されている。文献史学で認識されるギリシア人の移住の時期に関しても、三々五々にギリシア人が到来したのは従来の認識より早い事例も多く見られる一方で、組織的な大人数の移住の時期は通説より半世紀程度は遅いものが多いことが明らかにされている。

一方で文化人類学的アプローチやポストコロニアル的視点の活用などにより、発掘品の解釈にも新たな主張が提出されている。出土したモノのタイプからエスニシティや文化的影響を単純に判断することの問題が指摘され、これらのアプローチから西地中海に移住したギリシア人と現地人の関係の見直しがなされた。ワインやオリーブオイルの生産や消費を示す食器やアンフォラ、あるいは装飾品や武具が出土したからといってギリシア人の存在を必ずしも示すものではなく、一方で現地人の集落でそれらが発見されたとしても、ギリシア人と同じように用いられたわけではないと考えられるようになった。それゆえギリシア文化がそのまま受容されたことを示すとは限らず、Hellenizationという概念を適用することは控えるべきである。

③ 理論の援用

新たな枠組でギリシア人たちの西地中海

への移住や現地人との関わりを考えるためには、ただ史料の実証だけではなく、他の研究分野の理論を適用することが近年、多くの歴史学者や考古学者によりなされており、本研究でも先行研究を参考にこれらの理論を摂取した。本研究を行う契機となったパーセルとホールデンの研究は、地中海世界の特徴を mobility, connectivity, decentring と捉えており、マルキンなどの研究者がこの認識をネットワーク論という社会学の理論を援用してさらに証明しようとしている。大国の権力によるのではなく、エコロジー的にも多様な環境にある地中海世界において、必要物資の補完のため中近距離間の往来がなされている現実には、やはり絶対的な中心を持たず、様々な点同士それぞれが中心を介さず線で結ばれる関係性を重視する、ネットワーク論をもとに考察することは有効である。

一方、ギリシア人の移住の要因や移住後のコミュニティの形成に関しても社会学や文化人類学の理論が有効である。ベレントは文化人類学者エヴァンス＝プリチャードとフォーティスのアフリカにおけるフィールド研究と、政治学や社会学などで議論される「国家 (State)」の定義を参考にしてギリシア人のポリスを「無政府社会 (stateless society)」と結論した。これは社会から切り離された「強制的秩序維持装置 (警察や軍隊)」を欠く社会であり、秩序はメンバー間の話し合いによるコンセンサスで維持されたと見なすのである。このような社会であるとポリスを認識するならば、移住を近代以降の国家主体になされるイメージから脱却して理解することが可能になる。特にポリスのコンセンサスが取れない場合、あるいは個人の意志により人々が新天地をめざすことは、現代的な認識よりはるかに容易であったと想定できる。

最後に現地人との関わりに関しては考古学や文化人類学での Middle Ground 論が参考になる。これはネイティブ・アメリカンとヨーロッパから渡来した人々との関係に関する議論から生まれたものである。異文化が接触する中間の場があり (Middle Ground)、双方が物品の交換などを通して相互の理解に努めるが、そこで誤解なども生じて新たな認識や語彙が産み出されていくと論じられている。このような関係は西地中海への移住したギリシア人と現地人にも当てはまり、ギリシア人と現地人との二項対立的な理解は事実の誤認につながると思われる。

④ 通時性

上記の従来の文献史料理解への疑義、考古学的資料の新たな解釈、そして諸理論の有効性を考慮するならば、ギリシア人の所謂「植民 (colonization)」活動は少なくとも当初は、従来認識されてきたようなポリスという「国家 (State)」が組織的に推進したのではなく、ある集団、もしくは個人が自発的に

したと想定すべきである。そして移住当初、ギリシア人は現地人の集落内、あるいはその周辺に住み現地人化する者もいれば、現地人のなかにも彼らとの交際を通じて自らのアイデンティティをギリシア人として振る舞う者もいたと考えられる。また現地人たちもギリシア人と対峙することにより、それまでは異なるいくつかの集団が、徐々に一つのエスニシティとして統合されていったと見なすため、ギリシア人と現地人の関係は通時的にその展開を見なければならぬ。それゆえ文献史料に現れるさまざまなエスニシティも静態的に捉えることは誤りであり、一方でギリシア人を始めとして、その集団のラベルのもとには多様な人々が混在したと理解すべきであろう。

上記の想定が現実と見なせるのならば、このギリシア人の活動は静態的に捉えるべきではなく、通時的なアプローチをなすべきであり、現地人との関係のダイナミズムを前提に史料の再検討が必要であることが明らかになった。以下、これらの理解をふまえてタラス、マッサリアに関するケーススタディを示したい。

(2) ケーススタディ

① タラス (タレントゥム)

イタリア半島のかかとの付け根部分にあるタラス (タレントゥム、現ターラント) は、伝承では前 706 年にスパルタが建市したポリスである。前 8 世紀末のものと推定されるラコニア式の土器も出土していることから、この建市の年代が概ね受け入れられてきた。第一次メッセニア戦争後にパルテニアイと呼ばれ、市民権を得られなかった若者たちが企てた反乱が未遂に終わった後、ファラントスを指導者に彼らに移住させ建市させたというのが一般的に受け入れられている縁起話である。ここから第一次メッセニア戦争の年代を推定し、それをもとに第二次メッセニア戦争、大レトラの制定などのスパルタ本国における重要な諸事件の年代決定にも寄与してきた。

しかし近年の考古学的成果に拠れば、この認識には大幅な修正が必要である。確かに前 8 世紀末にギリシア人の存在は確認できるが、墓地に埋葬されたギリシア人は現地人に対して少数で、しかもラコニア式よりもコリントス式の土器の方が多かった。そして埋葬数が飛躍的に増大するのは前 7 世紀後半以降であるため、タラスは前 706 年に創建とは考えられず、その結果、スパルタ本国の事情に関する従来の認識も改めなければならない。これは 10 年ほど前に発表されたスパルタ近郊での地表踏査 (field survey) の成果から、スパルタ社会に大きな変化が起こったのが前 6 世紀以降と見なすことができることと合わせて考えると、詳細をここで述べる紙幅はないが、所謂「リュクルゴスの改革」を含むアルカイック期のスパルタ史の展開を書き

替える結論を導き出せる。

また伝承ではこの移住した人々は現地人と当初から対立関係にあったとあるが、実際には共生的関係にあり、敵対的になるのはギリシア人のコミュニティの拡大に伴うものであったと想定できるため、縁起話の内容は後代の状況を反映したものと見なす必要がある。加えてルカニア人に征服されたため、ポセイドニアのギリシア人が自らの文化や言語を忘れたという、タラス出身でリュケイオンに学んだ前 4 世紀末のアリストクセノスの言もこのコンテクストで理解すべきである。一方でスパルタ人ファラントスを建国者とする意識もコインの意匠からは、時期による変化が見られ、これらの結果から、現地人との関係や彼らのアイデンティティは時代に変化に対応して変わっていることが明らかになり、この地域の歴史はその観点から見直す必要を本研究で認識した。

② マッサリア

フランスの地中海岸に前 600 年頃、小アジアのフォカイア人が建市したと認識されているのが、現在のマルセイユのもととなったマッサリアである。前 6 世紀初めの小アジアのイオニア式の土器が出土していることから、この建市の年代は受け入れられてきた。前 5 世紀後半のヘロドトスが伝えるところによれば、フォカイア人はイベリア半島の大西洋岸で繁栄していたタルテッソスまで到達しており、一方でペルシアの侵攻に際して多くの市民が故郷を捨ててコルシカ島に移住した。彼はこの叙述でマッサリアに関して触れないが、前 5 世紀末のトキュディデスが、はっきりとフォカイアが母市であることを伝えている。現存するローマ期の叙述に拠れば、初めてマッサリアの地に到達したフォカイア人の指導者は、現地を支配していた指導者の娘と結婚して、この地の所有を認められ建市した。その指導者の死後、現地人との関係が悪化するが、その攻撃を防いで後の繁栄を基礎を築いたという。一方で、イベリア半島のエンポリオン (現アンプリアス) からコートダジュールのニカイア (現ニース) に至るネットワークを形成し、またローマとも友好関係を維持することで、前 3 世紀から前 1 世紀にかけて栄えたと認識されてきた。

しかしタラス同様、発掘の進展に伴いこの認識は修正を求められている。ギリシア人の痕跡が一気に増大するのは前 6 世紀半ば以降であり、前 6 世紀前半において当地で活発な活動をしていたのはエトルリア人であった。これもタラスの事例と同じように、当初はエトルリアのグラビスカなどに拠点を築き、ティレニア海を北上してきた様々な出自のギリシア人の集落が、ローヌ川の河口に近く内陸への入り口にあたるこの地に築かれ、前 6 世紀半ばに大挙してペルシアの侵攻から逃れてきた人々の到来により、そこで多数を占めたフォカイア人を母市にポリスとして成

立したと見なすのが妥当であろう。周辺部の発掘や縁起話、またその後の歴史などから現地人との関係も複雑であることがうかがわれ、特にエンポリオンやニカイア近くのアンティポリスを典型に、彼らとの接触の場が設けられたことが知られるので、この関係を理解するためには Middle Ground 論からのアプローチが有効であると考えられる。加えてフランス内部へのギリシア文化の広がりもガリア人の受け取り方は一様ではなく、これを Hellenization と理解することは事実誤認に繋がると言える。

フォカイアがギリシア世界ではほとんど目立たなくなっても、自らの母市とする意識をローマ期まで維持したのは、現地人との接触の深化に伴い自らのギリシア人としてのアイデンティティを失わないためであろう。加えてローマの勢力拡大に伴い、ギリシア文化を評価する彼らの好みを考慮して有利な立場を獲得しようとする意識からであったと考えられる（これは今回調査したネアポリスにも共通して見られる現象である）。現存するローマ期に叙述された縁起話からは、時代の経過にともない展開した彼ら自身の立場の変化を読み取ることが、重要であることを本研究では明らかになった。

(3) 本テーマの可能性

今回、本テーマに従事して明らかになったのは、古代地中海世界におけるギリシア人の実態を理解するためには、従来の史料の実証的研究やそれを考古学資料や金石文史料で補足する方法では不十分であり、なぜ彼らに関する文献情報が後世に伝えられたのかという、情報が継承される状況を理解し、残存史料の偏りをふまえて執筆された時代の状況も考慮しなければならないということである。それが叙述内容を大きく左右するならば、個々の事実ではなく、ギリシア人の社会やメンタリティ、アイデンティティの変化を通時的に理解することこそがギリシア史研究において重要であると思なせるであろう。

現地人との関わりについても、文献史料に現れる彼らのエスニシティ自体がギリシア人の認識にすぎず、現実を反映したものではないことが考古学的成果により明らかにされている点は注意すべきことである。現地人が見た世界がいかなるものであったのかも考古学的資料を中心に従来の枠組から離れて理解する姿勢が求められている。

最後に本研究に従事して最も重要だと思われたのは通時的視点であり、ギリシア人、現地人それぞれの活動、そして彼ら同士の関わりの変化のダイナミズムを考慮しなければ文献史料の解析自体に大きな支障をきたすということである。しかし本研究では時間的な制約のため、シチリアやイベリア半島のギリシア人と現地人の関わり、そして西地中海世界におけるカルタゴ人やエトルリア人、そしてローマ人も加えた多様な関係まで考察することがかなわなかったため、最終的な

結論を出すことはできなかった。今後、研究資金の補助を得られれば、本研究の成果をもとにこれらのテーマに着手したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 長谷川 岳男 「勝利か玉砕かーテルモピュライの戦いの記憶ー」『軍事史学』第 51 巻第 2 号、2015 年、pp. 4-28、査読無し。

② 長谷川 岳男 「西洋古典史料の成り立ちーその限界ー」『史料学の方法を探る』第 15 巻 (愛媛大学「資料学」研究会)、2016 年、pp. 8-16、査読無し。

[学会発表] (計 2 件)

① 長谷川 岳男 「古代ギリシア人の「植民」研究の新動向ー西地中海域を中心にー」フェニキア・カルタゴ研究会第二回公開報告会、放送大学東京文京学習センター (東京)、2016 年 3 月 13 日。

② HASEGAWA Takeo, 'Asia Minor in the Western Mediterranean - the images of Phokaian Connections -' *Understanding the process of Hellenization in Asia Minor*, Asia Minor Workshop, 20 March 2016, Kyoto University (京都府京都市)。

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 岳男 (HASEGAWA, Takeo)

鎌倉女子大学・教育学部・教授

研究者番号：20308331

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

宮崎 亮 (MIYAZAKI, Makoto)